

たけの調剤薬局 (茨城県結城郡)

服薬の重要性を理解してもらえれば、 高齢者のコンプライアンスは高まる

まず高齢者の生活環境をつかむ

たけの調剤薬局が立地する茨城県結城郡は、白菜、ナシ、メロンなどを産地とする農村地帯で、高齢化が進む地域である。同店利用者は、60歳以上の患者さんが約40%を占め、生活習慣病による来局が多い。

同店は、地域密着型の薬局として、在宅薬訪問指導を積極的に行い、高齢者への服薬指導に工夫を凝らしてきた。薬局長の中曽根英明氏は、高齢者のコンプライアンスを高める方法として、「個々の患者様に対応するしかない」と前置きした上で、高齢者の身体的な特徴を把握し、生活環境をつかんでおくことが重要だという。

誰が見てもわかることが基本

「薬の飲み忘れを防ぐためには、一日見て飲んでから飲み忘れる状況を作ることが重要で、高齢者は視力が低下してくるので、文字を大きく書くなどの配慮が必要で、また、夫婦で似たような薬を服用している場合や、家族の方が服用のお手伝いをされていることも多いので、誰が見てもわかるということが基本になってきます」。同店では患者さんの服薬状況や視力などに応じて、「あさ」「ひる」「よる」と薬を仕分けできるオリジナルの袋を活用している。また、薬は一包化するだけでなく、日付を色マシクで大きく書くことで、飲み忘れを防止している。

患者さんが話しやすい雰囲気づくりも大切

高齢者に正しく服薬してもらうためには、薬への関心を高めってもらうことが大切になる。そのためには、薬を飲むことの重要性を、いかにしてわかってもらうかがポイント



「あさ」「ひる」「よる」と大きい文字で色分けされた薬袋



たけの調剤薬局のスタッフの皆さん（前列左から、中曽根氏、竹野氏、大塚氏）

質問の仕方でも工夫が必要

イントになる。ただやみくもに薬の効用を説き、厳しく指導すればよいというわけではない。同店の母体である有限会社フーマーファカの代表取締役である竹野信吾氏は、「特に高齢者の方は、薬を飲まないことで、薬剤師に注意されたり、怒られたりしたくないという気持ちがあるから、薬を飲み忘れたことを隠してしまうことがあるのです。ですから、患者様が話しやすい状況を作り出し、実情を正確に把握することが大切になってきます」という。

患者さんの服薬状況を正しく把握するために、同店の薬剤師である大塚岳氏が服薬指導の際に心掛けていくことがある。「服薬指導の時には、一つの答えに向かって誘導していくのではなく、患者様が考えながら答えていくような質問の仕方をするようにしています。例えば、朝と夜、きちんと薬を飲みましたか』ではなく、『この薬は、いつ飲むべきかわかりますか』というようなことで、考えて答えていただくことで、薬に対してどの程度の意識をもっているかわかり、コンプライアンスが上がる理由に行き着くことがあります。また、専門用語を使わずに、わかりやすく話すことも大切です」。最後に中曽根氏は、「高齢者のコンプライアンスを高めるためには、患者様に正しく薬を飲んでほしいという思いが、薬剤師の熱意が、どれだけ伝わってくるかによって、きちんと服薬しない』と伝えていただくことで、コンプライアンスが高まることも多いのです」と語る。